

緑を通じた平和構築

コミュニティ・ガーデンで民族融和に取り組む ボスニア・ヘルツェゴビナの試み

2006年8月22日、和光大学総合文化研究所の主催により、「緑を通じた平和構築：ボスニアのコミュニティ・ガーデンから学ぶコミュニティ再生」と題した講演会が開催された。ボスニア・ヘルツェゴビナでは、1992年から3年半にわたった戦争により、25万人以上の人が死亡し、生き残った多くの人も難民になり、また深く心の傷を受けた。

講演者の一人、ダボリン・ブルダノビッチ氏は、民族和解をめざして2000年に設立された〈コミュニティ・ガーデニング・アソシエーション・オブ・ボスニア・アンド・ヘルツェゴビナ（CGA）〉のディレクターである。戦後11年目を迎えたボスニア・ヘルツェゴビナでは、多民族が混じりあって暮らす戦前のようなコミュニティが消滅してしまったが、CGAは、緑の力を媒介にして、人と人の絆を取り戻すコミュニティ・ガーデンという活動を行ない、成果を上げてきた。最初はサラエボのひとつの庭だけだったのが、現在は15に増えている。

日本でも、特に都市においては、人のつながりが希薄になった結果、自分と異なる価値観やライフスタイルを持つ他者への不寛容さが増している状況で、コミュニティの崩壊は大きな社会問題となっている。ブルダノビッチ氏は、東京都西東京市の特定非営利活動法人（NPO）〈birth〉の招請により、CGAの農業技術者であるヴァーニャ・ミヨビッチ氏とともに初来日し、8月20日から29日までの日程で、和光大学はじめ都内各地で講演会・視察・市民交流などを行なった。

もう一人の講演者、大塚敦子氏は、1986年以来フォトジャーナリストとして活動し、アジア・中東を経て現在はおもにアメリカとヨーロッパで取材している。ボスニアに長期滞在し、2006年に、CGAのコミュニティ・ガーデンを舞台にした『平和の種をまく——ボスニアの少女エミナ』という写真絵本を出版している。

両氏の講演からは、ボスニアでも日本でも人びとが平和にともに生きられるコミュニティをつくるには何が必要なのか、そのために緑はどんな役割を果たすことができるのかなど、平和構築やまちづくりに関心を持つ学生・院生と、緑や環境の保全に関心を持つ学生・院生の両者が、いっしょになって考えていくためのさまざまなヒントが得られるであろうと考え、本企画を実施した。

以下は、シンポジウムにおける大塚氏とブルダノビッチ氏の講演をふまえて、その要旨をまとめたいただいた文章である。

シンポジウム・コーディネーター：伊藤武彦（所員／人間関係学部教授）



民族を超えて仲よくなったボスニアクとセルビア人の少女たち *photo by OTSUKA Atsuko*



コミュニティ・ガーデンで、ともに働き、収穫を喜ぶ人びと *photo by OTSUKA Atsuko*